

目次	「真宗総合」への確認	1
	昭和58年度「指定研究」	
	研究計画紹介	2
	昭和57年度「指定研究」	
	研究経過報告	3
	昭和57年度「一般研究」	
	研究概要	6
	大正デモクラシーと真宗	11
	アメリカにおける日本学	
	の現状	13

研究所報

No. 7

1983. 7. 1.

「真宗総合」への確認

大谷大学教授 小川 一 乗

真宗総合研究所とは何か。研究所が発足して二年が過ぎようとしている現在、その活動は、指定研究、一般研究それぞれにおいて活況を呈して、少しずつその存在が確固となりつつあるこのときあたり、私の胸中に蟠っている想いを拭い去る意味において、あえて以下のことを確認しておきたい。

「真宗総合」というとき、その意味は、大谷大学における諸学が、各々の確固たる独立性を発揮しつつ、「真宗」という「仏教の人間了解」を学問しようとするところに、一致した指標を持つ、それが「真宗総合」ということであると私は理解している。しかるに、「真宗」といえば「真宗学」という固定観念が、いまだに、しばしば見受けられるのである。それも、真宗学においてではなく、真宗学以外の学に携る者の中に見受けられるのは一体どうしたことであろうか。「真宗」が大谷大学におけるすべての学が志向するところとなったことの表明が、「本学樹立の精神」であったと私は了解している。仏教学についていえば、かつては、宗乗と余乗という関係におかれていたが、真宗学と仏教学という名告りを実現した大正十一年を境として、ともに「真宗」を指標とする学として相互に学的に独立したのである。仏教学はその学としての独立性を堅持することにおいてこそ、仏教学にとっての「真宗」が究明されなければならない。そして、この仏教学にとっての「真宗」は、仏教学とは何か、という根源的な問いの中からのみ開発されてくるものであろう。山口益先生によって発見され確立された、釈尊成道における沈黙から説法へという動向の上に見出された仏教の大乗性にはじまる「大乘の仏道体系」こそは、

大谷大学における仏教学とは何か、というこの問いの持続する中から解明されたものというべきである。種々雑多な仏教学があり、それらはそれなりに学術的業績をあげてきているが、仏教学とは何のための学問か、という問いの欠如した業績には生命がないのである。かつて、仏教学は盛んでも仏教は盛んでない、との批判を見たことがあったが、単なる学術的業績のみが先行するとき、そのような批判を受ける結果となるのであろう。仏教学とは何か、という問いの持続する中で、その学術的研究が結実していくとき、それは単なる学術的業績に終始することをこえて、真に創造的な仏教の現在性を明らかにするということの一つの具体的な事例を、この「大乘の仏道体系」の上に私は見るのである。

この意味において、真宗総合研究所の基本的なあり方は問い続けられているであろうか。もし学術的成果という業績中心の形式的な総合化に幻惑され、上意下達的な意識構造の中で業績が追い求められるならば、それは業績の寄せあつめに空しく歳月を重ねるだけであって、「真宗総合」とはなりえないのではなからうか。「真宗総合」とは、大谷大学に関わるわれわれをして、その指標に向う意欲を積極的に促してやまないはたらきを自ら持つものでなければならぬのではなからうか。「自己とは何ぞや」と問い続けた清沢満之先生の精神、「本学樹立の精神」において大谷大学の学問の指標が「真宗」にあることを明確にした佐々木月樵先生の精神、それを真に了解しようとする大谷大学人としての自己確認を持続することなくして、「真宗総合」が意欲的に実動し実現されていくことはありえないと確信している。

大谷大学真宗総合研究所

昭和58年度「指定研究」研究計画紹介

昭和58年度の「指定研究」研究事業計画は、去る3月に開かれた研究所委員会において、審議された結果、次の如く決定せられた。

【真宗学事研究】は、近世、近代を通じての真宗教学の展開、特に真宗大谷派を中心とした学事の動向を、資料的な裏付けによって、研究を行うものである。前年度までのプロジェクト『真宗総合研究』によって、すでにこの方向での資料収集作業は、続けられていたのであるが、そのプロジェクトが終結されるに至ったので、今年度より、特にその資料を中心とした研究作業が企画され、承認されたのである。

【海外仏教研究】は、2年目の研究継続が認められた。昨年は、北米を中心とした過去20年にさかのぼっての仏教研究の、著作および論文の目録づくり、購入、更に文献解題作業等が企てられ、かなりの成果を上げている。本年度は、同様にそれらの作業が継続されるのであるが、範囲を年代的にも、またヨーロッパの英語文献等へも、広げられていくことになっている。

【大蔵経学術用語研究】は、『大正大蔵経』の「日本撰述華嚴宗関係典籍」の総索引の原稿化が終り、本年度中に出版される運びになっている。そのための作業継続と、続いて行われる予定になっている「日本撰述浄土教関係典籍における学術用語の研究」の準備のための諸作業がなされるのである。

研究名	研究課題及び研究組織
真宗学事研究 (特定研究 廣瀬 泉) (代表 学長)	研究課題 「真宗学事資料の研究」 研究員 大桑斉(チーフ・助教授・日本仏教史学) 江上浄信(専任講師・真宗学) 片野道雄(助教授・仏教学) 鈴木幹雄(助教授・倫理学) 若槻俊秀(助教授・中国文学) 北西弘(所長・教授・日本仏教史学) 武田武麿(主事・助教授・宗教学) 研究補助員 木場明志(助手・国史学) 経隆優(博士課程修了生・真宗学) 井上円、片山伸、金石忍、熊木剛、小島久佳、武田定光、畠山正信、深田虎雄、松尾直哉(以上博士課程在学中)
海外仏教研究 (特定研究 廣瀬 泉) (代表 学長)	研究課題 「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」 研究員 長崎法潤(チーフ・教授・インド学) 加来一丸(助教授・フランス語) 寺川俊昭(教授・真宗学) 箕浦恵了(教授・西洋哲学) 安富信哉(専任講師・真宗学) 北西弘(所長・教授・日本仏教史学) 武田武麿(主事・助教授・宗教学) 嘱託研究員 今井亮徳(開教使・在米) 今枝由郎(フランス国立科学センター研究員) 大河内了義(神戸大学教授) 羽田信生(在米) リノ・ベリーニ(本学非常勤講師) 研究補助員 宮下晴輝(助手・仏教学) ロバート・ローズ(本学非常勤講師) 山野俊郎、加来雄之、一楽真(以上博士課程在学中)
大蔵経学術用語研究 (委託研究 廣瀬 泉) (代表 学長)	研究課題 「日本撰述華嚴宗関係典籍における学術用語の研究」 研究員 古田和弘(チーフ・助教授・仏教学) 小川一乗(教授・仏教学) 鍵主良敬(教授・仏教学) 神戸和麿(助教授・真宗学) 木村宣彰(専任講師・仏教学) 福島光哉(教授・仏教学) 三桐慈海(教授・仏教学) 研究補助員 一色順心(助手・仏教学) 稲岡智賢(博士課程修了生・仏教学) 織田顕祐(博士課程在学中・仏教学) 大城邦義(博士課程修了生・真宗学)

昭和57年度

「指定研究」研究経過報告

真宗総合研究

「近代における真宗の展開」

研究補助員 経隆 優

「近代における真宗の展開」を研究課題とする真宗総合研究は、そのまとめの年として、昨年度の真宗総合研究所における「指定研究」に指定された。それをうけて研究班は、年度の初めに二回にわたる全体会議を開き、そのまとめの作業をいかに推進していくかを検討した。その結果、大略つぎのような方法でまとめていくこととなった。

まず、近代という時代区分を「明治期」、「大正・昭和前期」、「昭和後期」の三つの時期に分け、それぞれの時期をまた「教学」、「大学」、「教団」の三つの視点でおさえしていく。そしてそれぞれの時期および視点に立っての研究会を重層的に開催し、その中で各時期・各視点別の通史をまとめていく作業を最終的に進めていく。またそれらの通史をまとめていく参考資料とするために各研究員は、これまで過去三年間それぞれ分担して研究をおこなってきた歴史的事項についての研究成果をまとめた報告書を提出する。

まとめの作業は、このような方法に則って推進された。各研究員からは、例えば「護法運動」、「清沢満之新しい教学運動一」、「大正デモクラシー」、「同朋会運動の胎動と展開」、「近代化批判と大谷大学」等々の歴史的事項についての報告書をはじめ、多数の報告書が提出された。研究班は、これらの報告書や参考資料をもとに各時期および各視点別の研究会を幾度も開催してきた。今その一々の研究会については省略し、特に各通史をまとめていくうえでの総合化を計ることを目的として開催した研究会の中から視点別におこなわれた主なものだけを挙げておく。

その視点別研究会の主なものとしては、まず「大学」を視点において、本学名誉教授の藤島達朗・舟橋一哉そして多屋頼俊の三氏に「大谷大学を語る」と題して、昭和初年頃の大谷大学の状況を中心に語っていただく研究会をもった。また「教学」を視点においては、大谷高校教諭の福島和人氏に「近代真宗思想についての二三の問題提起」と題し、そして「教団」を視点には、龍谷大学助教授の福島寛隆氏に「日本近代化過程における真宗教団」(研究所報№5にレジメ掲載)と題してそれぞれ講演をいただき研究会を開いた。さらにまた「総合」を視点に、本学助教授の大桑斉氏に「真宗・総合・近代そして歴史学」(研究所報№6にレジメ掲載)のテーマのもとで研究発表を行っていただいたりしてきた。

研究班は、これらの研究会等々と並行しながら各時期および各視点別の通史をまとめる作業を推進してきた。またその間に編集委員会を三回にわたって開催し、通史をまとめていくための具体的な方法等の検討をもちかきわてきた。そして現在、そのまとめの作業も既に最終段階にまでいたっている。

また一方、史料年表班も、年度の初めに数回にわたる会議を開き、まとめの方法を検討した。その結果、年表作成にあたっては、年表が浅薄なものになるのを避けるために一挙に広く資料を網羅することをやめ、採録の範囲を『宗報』類だけに限定して作業を推進することとした。

作業内容は、真宗教学研究編の『近代大谷派年表』をベースにおき、まずその『近代大谷派年表』から明治以降の各項目をすべて「項目カード」に作成することからはじめた。つぎに明治以降から現在に至るまでの『宗報』類をすべて収集し、これに所載されてある関連記事と、『近代大谷派年表』に所載されてある各項目との照合確認をおこなってきた。さらにその照合確認の作業の中で、『宗報』類から『近代大谷派年表』に採録されていなかった関連事項をも可能な限り採録し、カード化してきた。そしてそのカードには、将来的な有効利用をも考慮し、記事所載の該当号数・年月日・所在頁数等を明記した。この作業は、現在ほぼ完了している。

また史料年表班は、この年表作成の作業と同時に、資

料収集の作業をも進めてきた。特に昨年度は学事に関する資料収集に傾注した。

そして『真宗大谷大学一覧』をはじめ、『大学寮條規』、『高等学事史料』、『大谷派本願寺史』等々約五十数点の、近代における真宗の展開をおさえていくうえでの基本的な資料を収集した。その収集した資料については、それぞれ制度・講義・典籍・人物・事項の五つの視点で線引きをして抜き出し、それらを年代順に整理した。同時に、これらの資料の内容を解読し、それぞれの資料について、その資料が語っている内容をおさえた「資料整理表」を作成してきたことである。

研究成果のまとめの作業を推進してきたこの真宗総合研究は、年度末までに概略このような段階まで結集されてきた。そしてこの真宗総合研究は、昨年度を以て終結をしたが、全体の最終的集約はまだ終わっていない。

しかしながら、この近代における真宗の展開史の概観をまとめる作業を通じて、新たに推進し、より一層具体的な成果を求むべき事柄が明確になってきた。それは具体的に言うならば、学事に関する基礎的資料の収集と、学事の展開を通観できる歴史記述の必要性ということである。この成されるべき事柄として明確になってきた課題が発展的に継承されて、本年度より新たに「真宗学事研究」として組織され、その研究が推進されることとなったのである。

「真宗学事研究」は、もちろん学事に関する資料の集積を主目的とするものではあるが、それは必然的に自ずと現在の大谷大学の歴史的な位置づけを志向するものとなる。従ってそれはまた、既に成されてしかるべきであった本学の三百年史の編纂のための基礎的作業をも伴うものとして将来的展望をひらいていくものといえよう。

海外仏教研究

海外における仏教研究の 文献資料に関する研究

研究補助員 宮下晴輝
(本学助手・仏教学)

これまでになされてきた仏教学・仏教研究は、真に「仏教を学として解放する」(『大谷大学樹立の精神』)ものであったかどうか。これは、少くともわれわれ大谷大学の研究者にとって、明言されたものとしては唯一の批判点である。そしてまた、この批判点を一歩進めることの困難は十分に承知している。それにもかかわらず当研究は、「仏教研究の研究」という性格を帯び、「海外仏

教研究」という名のもと発足した。第一年が経過した。以下はその初年時の報告書である。

当研究は、文献目録・研究会・資料検討会の三つを軸にして進められた。この三つの軸にそって報告する。

<文献目録>

この研究が初年時の最も重点的な課題としたのは、北米における仏教研究の文献目録を作成することであった。これまでに出版されている種々の文献目録(主要なものとしては、Guide to the Buddhist Religion, Frank E. Reynolds, ed., Boston, G. K. Hall, 1981; Bibliography of Asian Studies, Ann Arbor, Association of Asian; International Bibliography of the History of Religions, Leiden, E. J. Brillを挙げることができる)から抜き出したものに、更に関係諸雑誌を精査して完全を期した。1983年3月までに、研究論文2,560件、研究書640件についてのカード化した目録が作成された。1960年以降の北米における仏教研究は、これでは網羅されたといえる。しかし更に不備を補うため次年時にも継続されねばならない。

また上の作業と並行して、北米で出版された研究図書及び研究誌の収集も行った。400件の発注のうち、80件を入手している。更に北米の諸大学に提出された博士論文をも収集した。関係論文すべてではないが、University Microfilms Inc. of Ann Arbor, Michiganを通じて入手可能なもののうち、1973年以降のものはすべて入手し、111件の博士論文が閲覧できることとなった。

<研究会>

定例の研究会は、海外における大学の仏教研究の事情を知るため、海外の諸大学を訪ねられた方々を招き、海外の仏教研究者たちや、仏教研究のプログラム等について話していただき、研究員との間に意見交換がなされた。

1. 1982年5月20日 福島光哉(研究員 本学教授)
「ウィスコンシン大学における仏教研究の事情」
2. 1982年6月17日 William Kurtz(前客員研究員)
「アメリカ仏教研究の現状——私の個人的体験を通して——」
3. 1982年7月19日 Robert F. Rhodes(研究補助員)
「パークレイ大学とハワイ大学の仏教学について」
4. 1982年9月21日 梶山雄一(京都大学教授)
「アメリカの仏教事情——大学と研究所——」
5. 1982年11月26日 安富信哉(研究員 本学専任講師)
「アメリカ仏教学散見」

6. 1983年1月12日 白土わか(本学教授)
「フランス仏教学の動向、ならびに『全欧日本学会
第三次会議』についての管見」

<資料検討会>

海外における仏教研究の実際、その研究方法等を学び
批判的に検討するためにこの会が設けられた。初年時は
特に、浄土教の研究に焦点を絞り、以下の論文を取り挙
げ討議した。

1. 1982年10月26日 Julian F. Pas: "Shan-t'ao's
Interpretations of the Meditative Vision of
Buddha Amitāyus", History of Religions
vol. 14, No 2 (1974)
報告者 宮下晴輝(研究補助員)
2. 1982年11月2日 David Chappell: "Chinese
Buddhist Interpretations of the Pure Lands",
in Micheal Saso and David Chappell, eds.,
Buddhist and Taoist Studies I (Honolulu:
University Press of Hawaii, 1977)
報告者 Robert F. Rhodes(研究補助員)

3. 1982年11月16日 Hongwanji International
Center: Notes on "Essentials of Faith Alone";
A Translation of Shinran's Yuishinsho mon'i
(Kyoto: Hongwanji International Center, 1979)
報告者 藤嶽明信(研究補助員)
4. 1982年12月12日 Allan Andrews: "The Mean-
ing of the Eighteenth Vow: A History of
Religions Approach", in Ishida Mitsuyuki
Hakase Koki Kin'en Ronbunshu Kanko Kai, ed.,
Jodo Kyo no Kenkyu (Kyoto: Nagata Bun-
shodo, 1982)
報告者 萩原晃俊
5. 1983年1月25日 Minoru Kiyota: "Buddhist
Devotional Meditation: A Study of the Sukhā
vatīvyūhopadeśa", in Minoru Kiyota ed.,
Mahayana Buddhist Meditation: Theory and
Practice (Honolulu: University Press of
Hawaii, 1978)
報告者 一楽 真(大学院生)

大蔵経学術用語研究

日本撰述華嚴宗関係典籍 における学術用語の研究

研究補助員 一色 順心
(本学助手・仏教学)

大蔵経学術用語研究会は、昭和56年度より「日本撰述
華嚴宗関係典籍における学術用語の研究」という研究課
題のもとに、8名の研究員が4名の研究補助員の助力を
得て研究を進めてきた。この研究は『大正大蔵経』72・
73・74巻に所収の華嚴宗関係(戒律関係をも含む)の諸
典籍について、学術用語の分類研究および総索引の出版
を目的とするものである。すでに大谷大学大蔵経学術用
語研究では、昭和36年以来、インド撰述部索引3冊、中
国撰述部索引3冊を刊行するに至っているが、日本撰述
部に関しては本研究が最初の試みであった。『大正大蔵
経』に含まれる日本撰述の華嚴宗関係典籍は、奈良朝の
寿量から江戸時代の鳳潭・普寂まで二十数点に及び、数
多くの華嚴宗典籍の中でも各時代の代表的な書物が編入
されている。約2年を費したところの学術用語の選定や
分類研究は慎重な配慮をもってなされたのであるが、そ
の場合にもっとも基本となるものは厳密な解読研究であ
り、『大正大蔵経』テキストの正確な解読を通さずして

は学術用語の研究は不完全なものにならざるをえない。

『大正大蔵経』所収のインド撰述および中国撰述の諸
典籍に関しては、主に『高麗版大蔵経』を底本とし、加
えて宋元明の三本との校合が施されている。しかし日本
撰述の場合は照合すべきテキストが、各地に散在する古
寺や仏教系大学の図書館に所蔵の写本および和刻本など
をたよりにしているために、各テキスト間に文章上の異
同が生じ、解読作業の厳密化を困難なものにしている。
本研究の中で取扱った華嚴宗関係典籍においてもテキス
トの校合上の問題点が見出された。足利時代の学匠靈波
が『五教章』3巻を問答形式をもって解釈した『華嚴五
教章見聞鈔』8巻は、『大正大蔵経』所収本では高野山
正智院所蔵の古写本を底本としている。ところがこの古
写本とは別系統の流れを汲むと思われる古写本が大谷大
学図書館に存し、これとの校合によってより完本に近い
テキストの復元が可能になることが判明した。また普寂
の著書である『華嚴五教章衍秘鈔』5巻について、和刻
本との照合作業を行なった結果、『大正大蔵経』所収本に
は、巻3の終わりの部分に約400字の欠落が発見された。
この欠落を指摘しえたことによって、以後の『大正大蔵
経』73巻にその部分の増補が活字化されるとともに、欠
落箇所用語をも含めたかたちで総索引の編集を行なう
ことになった。

日本に『華嚴経』および中国の華嚴宗典籍が伝来した
のは奈良朝に始まり、当初は南都の学匠によって註解研
究がなされた。とくに華嚴の宗義を五教の立場から闡明

した法蔵の『五教章』が日本に齎されてより、この書物がしばしば講学の対象となり、多数の註釈書が著されつづけた。このような長い研究の歴史をもちながらも、日本撰述の華嚴宗典籍の研究はいまだ未整理の研究分野であるといえる。本研究に含まれる諸典籍の学術用語研究にさいしては、とくに華嚴宗の多岐に亘る学系や中国華嚴宗の教学にも十分に考慮が払われることを必要とする。たとえば、『五教章通路記』を著した凝然と『華嚴信種義』の著者高辨は、各々が独自の学風を形成し華嚴宗の二潮流とも称すべき学匠であったが、東大寺系と高山寺系というような二つの華嚴の流れが別個に存したのではなく、彼ら以前にも以後にも思想交流が少なからず保たれていたと考えられる。

また寿靈から普寂までの幾多の『五教章』註釈書には中国華嚴宗の智儼・法蔵・李通玄・慧苑・澄観・宗密などの著作が豊富に引用されている。これらの思想の受容過程および受容方法にそれぞれ異同があり、そのような観点からも日本華嚴宗の系譜の一端が明らかになる。たとえば法蔵の弟子慧苑の思想は、後の澄観によって厳しく排斥されたものであるが、現存最古の『五教章』註釈書である『華嚴五教章指事』には慧苑に対する批判的見解は見出せない。また華嚴宗の傍系とされた李通玄についても、日本においては高辨などの教学に多大な影響を与えたほどである。さらに『五教章真鈔』を著した江戸時代の鳳潭に至っては、従来の『五教章』註釈家が澄観・宗密や宋代の末註に依って解釈する研究態度を批議し、智儼・法蔵の師説に帰すべきことを提唱した。これらのように、華嚴の教学理解において日本の華嚴教学の歴史には、中国華嚴とは異質で様々な受容と変容の過程のあることが明らかになったのである。

日本の華嚴宗関係典籍における上記のごとき研究内容をふまえつつ、『大正大蔵経』3冊分に含まれる学術用語の総索引の作成作業を行なった。学術用語の選定に時間を要して57年度の半ばまで掛ったことになる。そのため以後の分類研究や原稿化の作業が過密なスケジュールの中でとり行なわれた。しかし58年4月末にはほぼ全原稿の完成をなし、先般、出版社へ原稿を搬入したところである。まもなく五十音索引の部分から順次、校正作業を開始し、本年度の末にはこの研究成果が『大蔵経索引・続諸宗部2』として刊行される運びになっている。

学術用語研究会では、さきの研究と並行して「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」という研究課題を設定し、昨年秋よりその研究準備を進めてきた。この研究は『大正大蔵経』83・84巻所収の日本撰述の諸典籍における学術用語研究を行なうものであり、主に神戸和麿研究員が大城邦義研究補助員等の助力を得て問題点の検討と部分的な選定作業が進行中である。

昭和57年度「一般

〈共同研究〉

大谷大学所蔵西藏蔵外文献の歴史的・思想的立場づけに関する研究

研究代表者 小川 一乗
本学教授 (仏教学)

本学における西藏仏教研究の歴史は、明治三十年代の若き学僧、寺本婉雅、能海寛の求法入蔵の旅によってその開幕を迎えた。能海寛は不幸にも志を遂げずして、雲南省の辺境阿教子の蛮族の毒手に斃れたが、彼の収集した文献は寺本婉雅によって無事日本にもたらされ、寺本請来の典籍と共に本学所蔵の龐大な西藏文献の一部を構成している。

現在本学に収蔵されている西藏文献のうち、甘殊爾部、丹殊爾部、宗喀巴全集、章嘉全集は164冊の近代的書物の体裁をとって影印北京版大蔵経として出版され、世紀の刊行事業として斯界を眩目せしめた。また、甘殊爾部の勤同目録を初め、「北京版西藏大蔵経総目録・索引」が刊行され、今も丹殊爾部の勤同目録が引き続き編纂されている。

北京版と共に請来された四千点以上にのぼる蔵外典籍も目録作製の作業が進められ、近年になって「大谷大学所蔵西藏文献目録」及びその和訳が出版された。

さてこの度の共同研究は、これら多数の文献の歴史的及び思想的意義の究明を究極の目的としている。ここ数年来、西藏人学僧を中心として、個々の文献の内容調査が進められてきており、本共同研究はそれを継承し発展せしめんとするものである。とは云え、本学所蔵の蔵外文献は量的にも甚だ龐大であるばかりでなく、内容的にも仏教に限らず、天文学・医学など多方面に及んでいるために、その全貌を把握することは極めて困難である。従って個々の文献の歴史的・思想的意義を究明するという本来の目的を達成するためには、その目的達成のための

＜一般研究＞

研究」研究概要

不可欠の前提として、まず、上記の蔵外文献目録に対する題名や著者名から検索しうる索引、及び内容項目による分類表の作製が必要であり、その作製を当面の目標としたのが本研究である。蓋し、この種の索引や分類表が備わっていないために、世界的にも類をみない程によく収集された本学の貴重な文献資料が、殆んど利用されずに死蔵されている実情は、斯学の発展のために極めて遺憾なことであるからである。

当面の研究目標を箇条書きすれば次の如くである。

1. 題名及び略題の西藏式アルファベット配列による索引
2. 著者名の西藏式アルファベット配列による索引
3. 内容項目による分類目録

1. に関して、西藏文献の正式の題名（フルタイトル）は非常に長いので、便宜上略題がつけられ、通常は正式の題名よりむしろ略題で呼称される。しかも略題は一つには限られず、二通り三通りに略称されるものもあり、その習慣になれないわれわれは、文献中に略題とおぼしきものを見出しでも、もとよりそれらの多くは現在手にしうる辞書には記されていないために、その意味がつかめず当惑することがしばしばである。この度、西藏人学僧との共同調査によって、殆んど文献の略題が確認されたことは、文献解読の上にも多大の便宜をもたらすことであろう。

1. に関してと同様のことが、2. に関しても言いうる。尊称の発達した西藏では、尊敬すべき人をその個有名詞で呼ぶことは礼を失することと考えられ、種々の冠称を用いて呼称する。その呼称をできる限り収集し掲載した。

3. に関して言えば、その基礎作業として、西藏人学僧の協力の下で、カード（19×24cm）に(1)文献名、(2)著者名及びその生存年代、(3)所属学派名、(4)内容の大綱という四項によって個々の文献の内容が確認されていった。この文献調査は数年間にわたってなされてきたが、そのカードに基づいて文献全体の内容が明らかになった現在、その分類法が検討されなければならない段階となったが

折しも西藏国立図書館において採用が検討されている西藏文献の分類法が伝えられているので、それを参考にしつつ、日本における西藏学の研究状況をも考慮した分類表が完成されなければならないであろう。ともあれ、現在のところ一応の仮りそのめめの分類表を作成し、それぞれの項目の下に、上記のカードを参考にして四千点を越える文献を分類配列し目録化し、その完成を期している。

これらの索引及び分類目録作製のためのカード化の作業は既に完了しているが、現在それを原稿に直す作業が進められ、ほぼ九割程度は完了している。原稿用紙には全て中横罫のレポート用紙(30×21cm)を使用し、題名索引は350枚、略題索引は150枚、著者名索引は50枚、分類目録は85枚の分量におよんでいる。

なお、これらの原稿の完成の後、索引の正確さを期するために、改めて原典の全てにわたって題名及び著者名の表記を確認するとともに、既刊の「大谷大学所蔵西藏文献目録」の正誤表を作製する作業を遂行しなければならないであろう。

このような目録・索引類の完成のためには、長年の歳月と多大の努力とを必要とすることは言うまでもないことであるが、その完成が西藏蔵外文献という未開の東洋文化の宝庫を開く鍵である以上、その宝庫を所有しているわれわれは、それを成し遂げるための労を厭うべきではないであろう。

いまや、ここに完成されようとしている上記の如き目録・索引についても、それが本学の研究所の研究事業として採用される以前からの数十年にわたる本学の西藏仏教研究の伝統の中での成果であることは言うまでもない。ここにわれわれは微力ながらその伝統の一端を荷負っているのであるが、今後いよいよ、それら西藏文献の「歴史的及び思想的意義の究明」というまさしくの本題に入らなければならないであろう。本研究においてその準備はいまや完了されようとしているからである。

＜共同研究＞

外国語教育(学習)の思想

研究代表者 岩見 至
 本学教授 (仏語学)

当研究班の研究目的と内容については『研究所報No3』にのべられているが、それは非常に広汎多岐にわたるもので志は高いが実際問題としては着手のいとぐちがつけにくい。研究年度開始(五十七年四月)以前において既に

数回の予備的ミーティングを行ってはいしたが、研究員相互の間で目的や内容、構想、計画、方法等について更に詳細な意志疎通、了解をうる必要があった。そこで四月六日の第一回ミーティングで改めてテーマの意味、意図、目標、範囲、方法等について討論が行われた。基本的にはこのことは以後も絶えず継続されることになるが、4・5・6月中に数回行われたミーティングではとりわけそうであった。しかしその間により具体的な取組みも早急になされる必要が痛感され、論議の結果、予備的プログラムの三本柱の一つである「外国」に關聯して外国の現状認識のためのアンケート調査が提案された。これはこういう共同研究でなければ実施しがたいことである。これに付随して資料探索のヒントを得るべく国内出版社に対するアンケートも企図された。内容、対象の範囲、文面等について検討がなされ、六月九日に国内出版社（主として外国語教科書や辞書を取扱っている約二十社）、六月二十八日に日本駐在外国公館（国連加盟の約九十国）に対しアンケートを発送した。（のちに追加発送あり）

七月十四日のミーティングでは、すでに若干の資料購入は行い、かつ各研究員がそれぞれの領域で（市橋＝英学、禿・友田＝独学、岩見＝仏学、安富＝清沢・佐々木・鈴木等）調査研究（明治期の外国語教育）を実施しているものの、全体として資料の探索蒐集が難点として浮び上った。これはあらかじめ推測されたことではあるがその打開を計るべく、七月二十一日から二日間代表者が上京し、出版社、国会図書館、東書文庫、公文書館等を歴訪した。その結果、明治期の外国語教育に関する有力な情報源の一つとして『文部省年報』を活用出来るであろうという見通しを持った。『年報』は昭和まで継続するので歴大であり（とはいえそれのみで十全というもので勿論ない）、差当り明治期についてこの資料の整理解説が研究作業の主要部分となる。

九月三日のミーティングにおいて全員から休暇中のまとめの報告と質疑を行う。禿研究員から資料探索の報告、市橋研究員から明治期英語教育の変遷と問題点の指摘、安富研究員から清沢満之と英語の係りの具体的様相についての報告、友田研究員からドイツ文化圏における言語、文化、認識等について原理的包括的な把握と視点の提示、岩見研究員から東京調査行の報告がなされた。それらの報告発表を踏まえた上で、上述の資料としての『年報』の取扱い方を論議したが、とりあえず各人が初期の若干巻を分担して通覧し、必要個所の抽出整理と問題点の発掘をすることとした。またこの時点までに若干のアンケートの返信があり、九月十日には返信の整理と付随する問題について討論、可能な限り徹底を期するため若干の国については改めて本国の政府機関にアンケートを再送付することとした。（十一月一日発送）（なお秋季に安

富研究員渡米のため不在、滞米中可能な限り関係情報蒐集するよう要望す）

十月二十七日、十一月一日、同二十四日、十二月二十日の各ミーティングにおいては上述の資料を主とした各個調査の中間報告がなされた。海外留学者数、外人教師数、生徒数、外国語学校数等の変動から、既知の事実の確認もなされたがまた若干の新しい映像も浮び上ってきたように感ぜられる。十二月二十日の後、代表者は更度上京し前回調査の補足を行った。今回新たに調べたところとしては教科書研究センターがあり、その蒐集所蔵する外国の教科書、とくに外国における外国語教科書は既述のアンケート調査を側面から援助するものとなる。

一月十二日、年初第一回ミーティング。明治前期の各種資料の数字の不明不一致に大いに困惑する。代表者としては『年報』以外の有力資料の探索に一種の焦りも覚えるが、事柄の性質上細かな個々の資料の発掘にまたねばならぬ点もあり、当面は『年報』の十二分の活用を全員に要請する。定期試験入試等終了後の二月二十五日のミーティングでは、年度末の一応のまとめへ向けて具体的目標の設定と役割分担をきめる。それは要約すれば、(1)外国語教育(学習)年表(明治前期)の作製、(2)外国における外国語教育(学習)の現状(アンケートの整理)とその理解・解釈、(3)明治期における外国語教育(学習)に関する資料の整理（これは(1)の年表を補足あるいは肉付けするもの）(4)個人における外国語受容の理念と実践、ということになる。

三月十二日のミーティングでは特にアンケート処理について討議したが、種々の点でアンケート調査の困難さを認知したことである。年度内最終ミーティングは三月二十五日に行い、市橋研究員より英語教育論争史について問題点をピックアップした報告をうけ質疑応答を持った。けだし、英独仏学の中で英学が各方面にわたって最も先行している故、その論争史は独仏学その他にも極めて示唆的であろうと考えられるのである。

以上研究状況を日時の経過を追って概括したのであるが、時間的機能的制約によるとはいえ、その進捗状態は甚だ不十分なものである。具体的にいえば日本の明治期のみについても完了しえなかったのであるが、幸い継続研究が認められたので、各研究員の研究態勢には依然として数々の制約がありはするが、初年度の経験を生かして次年度にはそれ相当の成果をあげることを期したい。

〈個人研究〉

征服王朝期における信仰形態

研究員 藤島 建樹
本学助教 (東洋史学)

征服王朝の時代は、南と北・漢民族と外民族との間に生存をかけた熾烈な抗争と巧みな融合が交錯し新しい歴史が創造された時期であった。したがってこの時期に関する研究は、個々の事象に対してはかなりの賑わいを見、その成果もすくなくはない。しかし南北相方が如何に行動し、如何に影響しあい、如何に変革したのかが充分に明らかになっているとはいえない。征服王朝史に立つものは北方民族の特性を強調するのに熱心で宋代史をみず宋代研究者は征服王朝を低文化の侵入者として軽視する。こうした研究者の姿勢に起因して、ことに金・元支配下の中国社会には不明な点が多々残されている。

このような観点から、本研究は宗教活動・信仰形態の面から金・元治下の中国社会の実状を究明することを目的としたものである。この時期、仏教界では禅僧の活躍、禅淨併修の傾向、白蓮・白雲宗の浸透と弾圧、元宗室のラマ教尊崇など、また、道教では華北における革新派全真教の伸張と江南での旧道教のまきかえし、そして道仏両者の論争と、宗教界の動向はまことに多彩である。そして、それらの基本的事象は先学の研究によってかなり明確に示されている。なかでも本学名誉教授野上俊静博士の『遼金の仏教』『元史釈老伝の研究』そして『中国浄土教史論』中の関係論文など一連のすぐれた業績は征服王朝仏教史研究の大きな基盤となっている。それを継承する意味でも本研究が本学においてなされなければならない課題といえよう。そこでこの先達に導かれ、近年陸続として出版される石刻資料・地志・寺観志そして文集類を検索することによって、より精緻な宗派の実態、より細密な地域の実状を明らかにしてゆくことを本研究の主たる活動とした。そのためにまず資料の整理に留意し、研究費の七五％を図書費に割いて、基本的資料であって本学では手薄な地方志類のうち山西地域に関するものを備えた。これにより、充分とは言えないまでも研究の基礎的体制を確立しえたのも成果の一つであろう。

具体的な活動の中心となったのは、元代の石刻関係資料の解読・分析に重点をおいた定期的研究会である。さいわいにも、最近『中国仏教社会史研究』を上梓し、宋代研究から征服王朝史への連結を試みようとする笹沙雅章氏(京都大学教授)と、禅宗史に加えて征服王朝史に堪能な西尾賢隆氏(花園大学助教)の囑託研究員へ

の就任をえ、常時研究会に参加して精力的に取り組んでいただき、貴重な御意見をいただけたことは、本研究を進めるにあたって大きな力となった。このような体制で研究会を継続できたこともまた大きな成果の一つであろう。研究会はおおむね隔週金曜日午後に行ない、前後二十回を重ねた。この間、山西地方の石刻文を収録した『山右石刻叢編』全四十巻の中より、元代部分を中心テキストとし、他に地志・文集等も参考にしながら解読・分析を行なうとともに、時代的・地域的状况の把握につとめ、研究期間中、二十四巻から三十一巻までの八巻について検索することができた。

このように進めてきた研究会の中で、征服王朝期における宗教活動に関して、従来あまり取り上げられていなかった幾つかの問題点がみいだされた。その一つに、蒙古朝治下における民衆と宗教信仰とのかかわりあいがある。

今までの各征服王朝の対宗教策の研究成果を概括的にみるならば、遼は国内の諸民族調和の紐帯として積極的に仏教を取りあげたが、それがまた亡国への一因ともなった。それを意識したのか遼につづく金は宗教への行政的配慮を怠らず、比較的冷静な態度を保持しようとした。そして元はラマ教という異質のものを投入し、一線を画する姿勢を示したが、これも亡国の遠因となった、ということができよう。しかし、これはあくまでも国家レベル、または行政段階での問題であって、宗教はそのような波に大いに左右されるが、圧倒的多数の民衆の手から手へと受け継がれ保持されてきたものである。ことに征服王朝期の動揺絶え間ない支配体制の中で、またより激しい政権交替の攻防の中で、民衆はどのようにしてその信仰を保持し、どのような思いで継承したのだろうか。このような観点から、昭和五十七年十二月十一日、本学で開催された仏教史学会第三十三回学術大会において「征服王朝期における信仰形態」と題して、検索中の元代石刻文を資料とし、地域社会における氏族関係や漢人世候の立場などに留意しつつ、さらには華北と江南という地域的差異にもふれながら、山西地方の民間における信仰形態について報告することができた。また囑託研究員笹沙雅章氏においては、同様の石刻資料『常山貞石志』を中心に宋元時代の宗派の実態を究明された。その成果は「宋元時代の慈恩宗」と題して、雑誌『南都仏教』に発表される予定である。これらは本研究の最大の成果といえよう。しかし、これをもって本研究が終わったわけではない。他にも、村落共同体と宗教との関係、地域社会における信仰形態の特徴など、多くの問題が指摘されたが、それ自体もまた大きな収穫であるとともに、今後に残された課題ともいえよう。

この問題点をさらに究明し、中国社会の様相を明確にしてゆくためには、研究活動をさらに継続させてゆかね

ばならないし、また研究者の範囲もさらに拡大させ、関係資料等も充実させて、より総合的な研究体制をととのえねばならない。このような立場で本研究活動を振りかえれば、まず研究期間の延長、さらには予算の拡充が望まれるところである。

なおこれを機に、竺沙・西尾両嘱託研究員の理解と協力を得て、この研究会は今後も独自の立場で継続してゆくこととなった。本研究の効果は、征服王朝期における信仰形態解明の出発点として、問題提起としての役割を担ったところに存したと考えられるのである。

<個人研究>

Abhidharmasamuccaya および 周辺文献の用語研究

研究員 桜部 建
本学教授 (仏教学)

〔研究の目的と方法〕唯識思想を体系化した一連の初期瑜伽行唯識学派の諸文献の中で、アサンガ（無著）の Abhidharmasamuccaya (AS) は、説一切有部のアビダルマ論書において形成された仏教の世界観を継承した上で、それを唯識思想に基づいて再構成しつつ、さらにそのアビダルマ的諸概念に対して、唯識思想の立場より明確な定義を与えるという特異な著作である。一方では、この論書は、初期瑜伽行派の基本的典籍であり、将来仏としてのマイトレーヤに帰せられる、漢訳で百巻にも及ぶ膨大な『瑜伽師地論 (Yogācārabhūmi)』の複雑多岐な内容を整理し分類するという側面を持つ。さらに全体の約三分の一とはいえ、アサンガの著作の中で、原典の回収されている唯一のものであり、しかもアサンガの主著であり、いまだ原典の発見されていない『撰大乘論 (Mahāyānasamgraha)』との間に、数多くの共通のメッセージを有する。従って AS の用語に留意しつつ、関連文献との比較対照の上で AS を解読することは、初期瑜伽行派の思想を解明する上で重要な手懸かりを提供してくれるものと思われる。

さてこの AS を研究するにあたって参照すべき文献は次の通りである。

(A) Abhidharmasamuccaya (AS)、アサンガの本論。約三分の一の原典がラーフラ・サーンクリトヤーナによりチベットで発見され、V.V. Gokhale がそれを出版している。P. Pradhan はこれの欠損部分を主として漢訳より補い、出版しているが、その補足部分はあくまで Pradhan の想像の産物にすぎず、その資料的価値には疑問が残る。他に、漢訳『大乘阿毘達磨集論』およびチベット語訳として現存。

(B) AS-Bhāṣya, AS に対する注釈。梵文原典 (N. Tatia により出版)、チベット語訳として現存。チベット語訳ではジナプトラ造とされる。梵文には著者名を欠く。AS 梵文欠損部分を多数引用し、AS 研究に最も重要な資料を提供する。

(C) AS-Vyākhyā. チベット諸訳および漢訳『大乘阿毘達磨集論』としてのみ現存。基本的には、(A) (B) を編集し、一書としたもの。漢訳ではスティラマティの編集とされる。

本研究は、AS を上記の注釈文献とともに諸訳対照の上で解読しつつ、AS 全体にわたって、各資料を比較して梵文散逸部分の復元につとめ、初期瑜伽行派の思想を解明するための基礎的知識を蓄積することを目的としている。従って研究の方法は、これらの諸文献を比較対照できるテキスト作成より始め、そのテキストを研究員・研究補助員による定期的研究会において解読し、その終了した部分については、語彙をカードに収集するという方法をとった。

〔研究経過〕上記の研究目的および研究方法に従い、研究会の前段階として、研究補助員 (松田) が諸訳対照のテキストを順次作成し、漢訳については研究補助員 (加治) が、チベット語訳については研究補助員 (中野) が諸版の異同を確認した上で、研究員 (桜部) を中心とする研究会を毎週定期的に行い、解読に努めた。さらに研究会においては、梵文散逸部分の復元について討議を重ね、結論の出た箇所については Pradhan の還元梵文を訂正した。そして解読の終了した部分については語彙をカードに収集し、将来の AS の索引作成のための資料とすべく留意した。なおこの作業は研究補助員 (大窪) があつた。

さて、三月末日現在の作業の進行状況であるが、まずその前に AS の構成を述べておきたい。AS は大きく二つの部分に分けられている。その第一部では、アビダルマ的諸概念に定義 (lakṣaṇa) を与え、第二部では、その定義された諸概念を唯識思想の立場より分類し、確認 (viniścaya) するという構成がとられている。この全体の分量は、注釈部分も含めると、漢訳で全十六巻におよぶが本年度中に、この第一部に相当する部分 (漢訳「本地分」に該当、分量的には AS 全体の約三分の一) については今述べた作業を終了した。与えられた期間内にすべての作業を終了することができず残念であるが、今後ともひきつづき研究員・研究補助員が各自作業を継続し、最終的には AS 全体の和訳および索引を完成させたいと考えている。なお本年度の研究成果として、現時点までに作成した諸訳対照テキスト、および AS の内容に関係した論文二篇を提出したい。

研究補助員 松田 和信 記

『真宗総合研究』
個人分担研究報告

大正デモクラシーと真宗

研究員 鈴木幹雄
本学助教授 (倫理学)

(一)

「大正デモクラシーと真宗」という題はどのような問題を指示しているのか。「大正デモクラシー」を単に大正時代の名目的な指標とみなすならば、問題は、大正時代の真宗ということになるだろう。あるいは「大正デモクラシー」を憲政擁護と普通選挙実施を求める政治運動に限定してみるならば、それに対する真宗の同調ないし対抗の動向が問われることになるだろう。または真宗内部における革新的動向が大正デモクラシーの一つの表現として認められる可能性もなしとしない。だがおそらくここで問われるべきことは、「大正デモクラシー」を大正という一つの時代の根本規定とみなして、真宗をそのような時代全体のなかに位置づけ、時代と真宗との歴史的応答の経歴を考察することなのではないか。もしそうなら、その経歴で目立つ事実は少なく、しかも真宗は大正デモクラシーの動向に対抗する動きを示しているともみられる。

だが、いまあえて「大正デモクラシーと真宗」の歴史的応答関係を問いたおそうとすると、私たちの念頭には、従来明らかにされた事実を越えて、かつての一向一揆のイメージがぼんやりと浮かび、デモクラシーと真宗を結びつける民衆の観念があらわれるのではないか。真宗が真に民衆の宗教であるならば（あるのだから）、大正デモクラシーに無縁であるはずはない。歴史学はその隠された関係を発掘しなくてはならない、もしそうでなければ、大正デモクラシーは時代の根本規定ではなく、単なる歴史の表層的事件にすぎないか、あるいは、大正時代の真宗が民衆の宗教という本質を失っていたのか、どちらかである。このような想念から生じる問題はすでに実証的研究の次元を逸脱しているが、私たちが課せられているのは、まさにそのような想念から発し、実践的意識に方向づけられた問題にはかならない。

(二)

「大正デモクラシー」を大正時代の根本規定とすることに問題がないわけではない。この「明治と昭和の谷間」を一つの独自の性格をもつ時代とみることがどのような意味でできるのか。視点のとり方によっては元号による

のとは違った時代区分も可能であり^①、また時代の画期的時点をどこに見出すかについても説は分れる^②、だが大正時代が一つの時代として生きられ、ある種の感情ないし気分のなかで経験されたことはたしかであり、その経験が多様であったこと自体も注目されてよい。ではそのような多様な相をもつ時代をデモクラシーの時代と規定することは妥当なのか。ここに、一つの時代を全体として規定するものは何か、という問題が浮かび上る。大正時代は、おそらく偶々、憲政擁護運動に始まり、普通選挙法の成立をもって終わっている。このデモクラシーの動向は「閥族打破」という姿勢によって明治時代に対立し、「治安維持法」の成立によって昭和時代から断ち切られている。その点で大正デモクラシーは大正時代の指標になる。しかし政治的事象を中心に歴史を区分し記述することと政治を歴史の根本規定とすることは別である。大正デモクラシーをその時代の根本規定とするためには、政治的事象から時代の根本的動向を読み取らなくてはならない（読み取り得るのでなくてはならない）。

では大正時代の根本的動向とはなにか。それを規定するものは明治以来の天皇制国家にほかならない。明治の天皇制国家の意志こそ近代日本の歴史過程全体を貫く軸である。明治時代における「文明開化」も「殖産興業」も、さらに「議會開設」も明治国家の強力なイニシアチブによって進められたことはいままでのない。これら一連の近代化政策の狙いは天皇制国家の統一と独立であった。そしてこの政策は日本の社会に根本的な変革をもたらしたと思われる。なぜならそれによって日本社会の伝統的共同体が解体・再編成されていったからである。

明治国家は幕府権力の単なる継承ではない。幕藩体制は地域的な村落共同体を基礎としていたが、明治国家は徴税・徴兵の効率化のため、また一元の支配を貫くために、旧来の村役人を中心とする村落の自治を否定し、新しい地方自治体制によって村の有力者を官僚化しながら、土着文化（民俗）を抑圧して生活改善運動（経済合理主義の推進）を企てている^③。この共同体秩序の解体は地主一小作制の発達、資本主義の発展に促された都市の増大などと連動して進行した。これによって、人間の諸

活動（経済、文化など）は伝統的桎梏から解放されて自由になり、自律的な展開を示すが、逆にこの自由が国家の内的統一を脅やかすことにもなる。明治天皇制国家はこの危機的状況に直面しつつあるときに、カリスマ的支配者・明治天皇を失ったのである。こうして政治が社会的諸力の拮抗する場として際立ってくる。

いわゆる大正デモクラシーは軍事費削減をめぐる軍閥と議会の対立から始まったが、これが新聞・雑誌を通して宣伝されるにつれ、一般を捲きこみ、その政治的自覚を促したと思われる。この政治的キャンペーンを通して、小作争議や労働争議あるいは米騒動や部落解放運動は普選運動と結びつき、デモクラシー運動を盛り上げていく。逆に政党がこれらの民衆の要求を汲み上げ、それに一定の方式を与え、新しい秩序の形成に自覚的に参加させる道を用意する限りで、政党は天皇制国家に対して譲歩を強いることも出来たであろうが、民衆と遊離したとき、実質的には挫折したのである。こうして天皇制国家は議会制度の手直しによって地主・資本家層を体制に取りこみ、民衆にファシズムの秩序を押しつけていったのである。それにもかかわらず大正時代をデモクラシーの時代として規定するとすれば、それは、封建的共同体秩序の解体のなかで、新しい秩序形成の可能性が最も大きく、種々の可能性が自覚的に追求された時代であったからである。その点からすれば、吉野作造の民本主義だけでなく、武者小路や有島武郎の企ても、さらには「世の立て替え・立て直し」を訴えた新（興）宗教もデモクラシーの動向の表現として読み取れるであろう。新宗教が社会主義運動とともに国家権力によって弾圧されたのもそれなりの理由があったのである。

（三）

大正時代は明治国家の近代化政策によって加速された伝統的秩序の転換期であるとみること、その多様性が理解されてくる。このなかで、宗教、殊に真宗はこの転換をどのように経験したのだろうか。

一つの時代のなかで宗教を位置づけるというとき、その宗教とは何かが当然問題になるが、ここではさし当り教団としての各宗派を思い浮かべればよいだろう。そしてここでは伝統的宗派が問題になる。これらの伝統的宗派の関心事は、明治以来失われた国家権力との関係をどのようにして修復するかにあった。明治維新はその復古主義によって仏教を権力の保護下から解放し、キリスト教と同じ自由を認めた。しかし仏教はこの与えられた自由で苦しみ、その固有の宗教活動を通して独自の存在理由を社会的に見出しかねたらしい。そこから仏教は国家権力への接近を計ることになる。例えば「明治四十五年二月、内務次官床次竹二郎の提唱で、神仏基三教の代表者を集めて三教会同が行なわれ、各代表は『皇道ヲ扶

翼シ益々国民道徳ノ振興ヲ図ル』ことを決議した」^④ この仏教の意向はやがて大正デモクラシーに同調する形で、僧侶の被選挙権獲得の運動を生み出していく。大正十年二月六日に開かれた「東京仏教徒大会」^⑤は、「民心指導」「国民教化」の責にある者として、「宗教と教育とをして政治を補翼せしむる」ために僧侶の被選挙権を要求している。同じころ、中外日報社主催の講演会で講演者のひとり是这样言っている、「最後に私は諸君に訴へたい。現在の僧侶には村会議員になる資格さへないために、村の小学校の式場に臨んでも太郎作五郎平の村会議員等の末席に小さくなって坐はらせられる有様で、公開の席上では僧侶は常に末席である現状だ、かかる無権威者として取り扱はるゝも参政権なき為である。……我々は村会議員にもなれぬため私は布教の上に困難を感じた経験が数々ある」^⑥ はしなくもここには僧侶の権威への渴望がうかがわれる。僧侶の被選挙権への要求は、一面では大正デモクラシーの発現でありながら、その実質においては結局支配への参加を目指しているといえる。しかも注目すべきは、ここで「参政権」（被選挙権）が権威の源泉とみなされていることである。封建的価値観の否定された後で、新しく秩序づけられる社会のなかで国家権力が究極的権威として成立しつつあるのである。

仏教一般の動向は真宗においても同様である。いや真宗こそ仏教諸宗の中の最有力な宗派としてその動向を主導したのである。明治四十三年、東本願寺は大逆事件に連座した大谷派僧侶高木顕明を擯斥処分にし、大正十三年には大谷家と久邇宮家との婚姻が成立している。また大正十一年、創立したての全国水平社が東西本願寺に対して「二十年間募財拒否」を申し入れるとき、真宗は大正デモクラシーの潮流に対抗するものとして立っていることがわかる。

だが、真宗が国家権力に随順するとき、逆に宗教の自律性を最も徹底的に追求したのも真宗なのである。「パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり」と断言したのは清沢満之であった。宗教的要求を自己の根拠とするこの立場を継承し、伝統的宗学と対立しながら宗学の刷新をもたらしたのが野々村直太郎であり、曾我量深・金子大栄であった。かれらはいずれも異安心とされたが、その異安心問題は伝統宗学の扱った異安心問題とは異質のもののように思われる。そこではもはや教相判釈が問題ではなく、経験に即した教義の理解が問題なのであり、従来の理解の枠組は仏教学と近代科学の知見によって否定されざるを得なかった。そこに野々村の「浄土教批判」の必然性があり、曾我の「仏教史観」、金子の「浄土の観念」の不可避性があるといえる。だがそれについて語ることは「大正デモクラシーと真宗」の問題の枠を

越えることになる。ここではただ、伝統的な共同体に対応していた世界観が真宗の近代教学では解体し、大正時代にいよいよ再形成される試みが始まったことに注目したい。それを辿ることは真宗教学史の課題である。

注

- ①竹村民郎『大正文化』（講談社現代新書）講談社。
②嶋田厚「大正の経験」（『大正感情史』序章）日本書

籍、1979年。Cf. 中島健蔵『昭和時代』（岩波新書）岩波書店。

- ③大島美津子『明治のむら』（歴史新書）教育社。
④村上重良『近代日本の宗教』（講談社現代新書）講談社。84頁。
⑤「中外日報」大正10年2月8日。
⑥同上

『海外仏教研究』
研究会報告要旨

〈指定研究〉

アメリカにおける日本学の現状 —特に中世の文化を中心として—

日時 昭和58年5月17日(火)
場所 研究所 会議室

Royall Tyler (ウィスコンシン大学)
東亜語学部助教授

中世日本に対する興味は、最初、目で見られるもの、つまり庭園、茶の湯、能に向けられた。第二次大戦後、アメリカにおける日本研究家の数が大変多くなり、平安時代や江戸時代の文学については、かなり紹介されるようになった。日本の中世については、文献的に非常にむづかしく、日本人によってそれほど高く評価されなかったものも多いので、アメリカにおいてもあまり注目されなかった。ところが近年ようやく日本の中世研究をする学者がふえ、中世研究の時代に入ったという印象を受けている。それには近年アメリカ人の中に、ヨーロッパの中世に関する興味が非常に高まり、Society for Creative Anachronism というようなものまで創られていることがその背景にあるのかもしれない。

私は、平安中期、末期から室町中期あたりまでを中世とみている。ここでは鎌倉新仏教や茶の湯、生花、庭園、王朝文学についての研究の紹介は省略したい。説話文学は以前から知られているが、その研究はまだ未開地である。能については、私も翻訳や研究をしているが、その研究者の数は信じられないほど多い。

中世日本の説話や伝説の研究としては、Stanford大学のSusan Matisoffは蟬丸伝説の研究をもとに、文学や能、文楽、歌舞伎にあらわれた蟬丸伝説の系統について研究し、The Semimaru legendという著書を出版した。『曾我物語』も徐々に注目されはじめ、Study of Soga themes in literature という論文を書いた Laurence Koming (Portland State大学、Oregon)がいる。中世の民間信仰と民間文学についての研究者も多い。その代表的な人はPennsylvania大学のBarbara Ruchである。彼女は大学内にInstitute for Medieval Japanese

Studies (中世日本学研究所)を創立して、活躍している。特に民衆や庶民に注目して、民間文学としての『奈良絵本』や『御伽草子』の意味の重大さを強調し、また、絵解についても造詣が深い。

民間信仰としての修験道は、ヨーロッパではかなり以前から研究されていたが、アメリカではあまり注目されなかった。中世日本を理解するためには重要な意味をもっているもので、これからアメリカでもその研究が盛んになるであろう。

絵巻物についての研究も今後盛んになる分野である。従来は主に美術史の面から捉えられていたが、詞書の分析や研究も行われるようになってきた。Yale大学の女性研究者が『一遍聖絵』の詞書を全訳したとのことである。Chicago大学の大学院生も、美術の面からそれを研究している。私自身は、『春日権現験記』を研究している。

本地垂迹思想については、少くとも4、5名の研究者がいる。その中でも秀れているのはAllan Grapardである。彼は現在、ハワイのEast-West Centerで活躍しているが、典型的なフランス人学者であり、吉田神木や三國神道、また春日信仰について研究している。美術の面では、Princeton大学のChristine Kandaは八幡信仰の美術を研究しており、景山春樹著『本地垂迹の美術』を英訳した。私の妻Susan Tylerは、春日曼茶羅についての博士論文を書いている。以上述べた絵巻物や奈良絵本、本地垂迹思想、絵解、修験道は、中世日本のごく代表的な現象であり、これからますます研究される分野である。

中世研究において、cognitive geography (認識地理) という全く新しい分野が考えられる。本地垂迹思想、修

験道、春日信仰、靈山信仰などの研究テーマは、ほとんどこの cognitive geography に入る。平安時代末期や鎌倉時代の興福寺を研究する場合、興福寺と大和靈山全体との関係にまでその研究視野がひろがる。つまり興福寺を中心とする地形に関する思想的、宗教的意味を考へることになるのである。春日信仰にしても、その中心になっている三笠山の地形を考えると、宗教的、詩的な意味がますます深まる。また、日本文化の特徴の一つは、文化の連続性にある。日本人が昔からずっと同じ土地に住んでいるという点で、風土と人間との関係は深い。詩歌や紀行文学、あるいは宗教にしても、詠情を大切にすることはほとんど、cognitive geography が扱う分野である。

中世日本研究において、特に活躍している人をもう少し紹介しておきたい。歴史家では Yale 大学の Jeffrey Mass が、鎌倉時代の幕府、荘園に関する研究書を何冊も出版している。Columbia 大学の H. Paul Varley は、応仁の乱の研究、神皇正統記の英訳を出している。宗教、文学の面では、Cambridge 大学の Carmen Blacker は、

日本のシャーマニズムとか 修験道の研究家である。Arizona 大学の James Foard は、『一遍聖絵』を宗教歴史家の立場から研究している。南山大学の Michael Kelsey は『今昔物語』の研究家である。Marian Ury (Univ. of California at Davis) は『今昔物語』を英訳した。Columbia 大学の Donald Keene については、あまりにも良く知られているので、ここであらためて紹介する必要はないであろう。『平家物語』の英訳には、Kitagawa & Tsuchida と A. Sadler の二つが出ている。Helen McCullough (California 大学 Berkeley) が英訳した『太平記』と『義経記』は大変役に立つ英訳である。U.C.L.A の William La Fleur は中世文学における宗教をテーマとし、西行の和歌と信仰や、中世文学における天台仏教の影響について論文を出している。Washington 大学 (St. Louis) の Robert Morrell は博士論文で『沙石集』を研究し、最近では明恵上人や解脱上人について研究しているが、アメリカでは初めての研究である。North Carolina 大学の James Sanford は最近、一休宗純についての論文を出した。

研究所行事

公開講演会 4月4日(月) 午後3時～ 於会議室

講師 ルイス・ゴメス氏 (ミシガン大学仏教学教授)
 講題 「希望の宗教としての仏教 — インド仏教からみた親鸞」

真宗学事研究 研究会

4月以降の研究会は次の通りであった。

5月31日(火) 「『大谷派学事史』
 — 宗学草創期 —」
 本学助教授 大桑齊氏

6月27日(月) 「初期真宗学の思想史的意義」
 龍谷大学専任講師 平田厚志氏

海外仏教研究 研究会

4月以降の研究会は次の通りであった。

5月17日(火) 「アメリカにおける日本学の現状
 — 特に中世の文化を中心として —」
 ロイヤル・タイラー氏 (ウィス
 コンシン大学東亜語学部助教授)

6月21日(火) 「オランダの宗教事情の瞥見」
 神戸大学教授 大河内了義氏

6月29日(水) 「アメリカにおける仏教学の現状」
 京都産業大学教授 一郷正道氏

編集後記

今号は、3月迄で区切りとなった指定研究、一般研究の一年間の研究経過報告を中心に、編集された。(なお一般研究中、個人研究の一つ、志水宏行助教授による研究経過報告は未提出のため掲載できなかった。)

以上の研究成果の論文は、今秋『研究所記要』第1号の発刊によって公けになるはずである。

今年も新たな研究が、すでに4月より出発している。一般研究については前号にて紹介済みで、指定研究は今号に掲載されている。それらの目的、内容については、次号より順次、担当者に執筆をお願いすることになる。

特筆すべきは、『真宗総合研究』が発展的に解消され、『真宗学事研究』へと受け継がれたことである。研究所の事業目的の一つである資料収集を当面の目的としているが、その積み重ねによって今後、いろいろな総合研究や共同研究を可能にするであろう。

『海外仏教研究』では、コンピューターが購入された。北米における仏教学関係の著作、論文収集に目ざましい努力がなされているが、その目録整理のためと、今後、多角的な資料提供がなされるためである。(武田武磨)

研究所報 第7号

1983年7月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

603 京都市北区小山上総町